
とある異質な右腕（メインアーム）

風樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある異質な右腕（メインアーム）

【Nコード】

N7536R

【作者名】

風樹

【あらすじ】

超能力さえも普通とされる街学園都市
だがそこにいる犬歯が目立つ少年、六宝才牙は『異質』だった
その「異質」さにより過去に色々あった彼だが、今は自由の身となっていた

そんな中、とある出来事をきっかけに佐天涙子と初春飾利は 其の命を狙われることに…。

事件はスキルアウトや警備員を巻き込み次第に大きくなっていく。
風紀委員の友人の頼みを受けた六宝才牙とその仲間達、そして元ス

キルアウトの 浜面仕上らは二人の命を守るため、または事件の解決のために動き出す。
権力と正義が交差するとき、物語は始まる——！！

序章 託された願い（前書き）

今晩は少々遅くなりましたが、とある新シリーズ投稿します 以前から自分のもう一つの作品とある野望の凶刃を読んでいる方はありますがとうございます こちらの作品で初めてお会いした方は初めまして将真と言います

もし面白いと思ったらとある野望の凶刃も宜しくお願いします（宣伝かよ？）

序章 託された願い

（どうしてこんなことに）

猿ぐつわをされ、手足を縛られている小笠原賢一は、己自身の不運を呪った

自分は何も悪い事はしていないむしろ正しい事をしたはずだった。

だが相手が悪かった そう相手が

人の 思いもこの世の正義も権力と言う名の理不尽な力の前では無意味なのだ

（これまでか）

自分の部屋で床に転がされながらも小笠原賢一は唯一ふさがれていない視覚で

自分をこんな目に合わせた侵入者を見る

侵入者は二人一人 はちゃらい格好をして片耳にピアスをつけている男そしてもう一人は警備員の格好をしている男だ

だが変装でもなければコスプレでもない 事を賢一は知っている。その正体もスキルアウトである賢一は把握している。

本物の警備員であることを

（まさか警備員が依頼主だったなんてな）

賢一は己の迂闊さを 床に寝かされながら 呪うが時はもう戻らない

（あいつらは俺が他に情報を流してないか、自分たちの悪事の証拠を持ってないか、他の誰かに話してないか、徹底的に調べるつもりか）

賢一は首だけ上げて 自分の部屋の中をあさりまくっている、
二人の侵入者を憎しみのこもった目で見る

侵入者たちの家探し が終わったら自分が 殺される事を賢一は
既に理解している

だがもうどうすることも出来ない

二人の侵入者のうち 一人は治安維持を司る屈強な警備員、もう
一人は高位能力者の殺し屋、仮に縛られ身動きとれない状態でなく
ても、非力なレベル0である 賢一は逃げる事すら ままならない
だろう 現に侵入されて僅か 数秒後には床に倒れ 伏していたの
だ

（もうどうしようもない）

己の死を覚悟した
賢一は死の恐怖より も気になる事があった

（警備員への通報が 駄目だった以上
もうあの娘たちの危機を誰にも教える事が出来ない。

どうしようもないのか）

賢一は自分が救いたいと思った少女たちの身を案じた

賢一が柄にもなく正義の行いをしてでも仲間たちを裏切っても
守りたいと思った
少女たちの事を

（佳奈実には悪い事をしちまったな。

19で父なしの子持ちにしちまうとはな）

次に賢一は愛する彼女とそのお腹の中にいる、まだ見ぬ我が子の
事を思った

彼が正義感に燃えた のは生まれてくる子 に恥じない父になり
たいと思ったからだ

そして同じ父親として彼女たちの親が理不尽に娘たちの命が奪わ
れると思うと他人事とは思えなかったのだ

だから裏切った

巨大な権力が敵になるとわかっていても

（でもまさか学園都市の治安維持を司る警備員がグルとはな

もちろん全てでは ないだろうが

俺が通報に行った詰め所に敵に通じてる 警備員がいたとは
ついてなかったぜ）

賢一は遠い眼で天井 を見上げながら、己の浅はかさを悔やんだ

（俺も直に消される 警備員が敵なんだ
俺の死も事故か何か で闇に葬られて終わりか……待てよ事故

そうか！)

賢一の脳裏に天啓が 閃く

(事故に見せかけられたら、必ず警備員か風紀委員はここに来る。
その全てを敵の仲間たちだけと言うのは無理な筈だ。

事故を他殺と見破ったりは出来なくても 遺言か何か残しておけば、誰か一人は気づいてくれるかも知れない。問題はどややって遺言を遺すかだが、それは俺の能力を使えばなんとかなる)

賢一は実は能力者だった

能力開発の壁にぶつかり悩んでいる時

能力などを気にもしないで生きている

スキルアウトたちを 見て惹かれ能力者で あることを隠し
仲間入りしたのだ

(まさか使えないと 思っていた能力が死の間際で役に立つとは
な)

賢一は今なお家探し を続ける侵入者たちを注意して見ながら、
精神集中しだす

能力を使うために

(スキルアウトの仲間たちにバレないようにとずっと使ってなかったからな。うまくいくといいんだが)

賢一は慎重に自分の能力を発動させる

賢一はレベル2の時間系能力者だ

その効果は肌に触れた物体の流れる時間を停止する事が出来る。

keep(保存)

ただし手のひらサイズの大きさのモノという条件が付くが、効果持続時間は最高で1日から最低でも数時間をもつ

なお能力に比べてレベルが低いのは、1日に数回しか使えないからであるのと、生物には使えないからである

賢一は能力を使って、ポケットの中にある携帯電話と反対のポケットにある大事な物の時間を止めた

(これでよし。

携帯電話は2つ持っているとは思わない だろうしさっきからの雑な家探しぶりを見る限り、俺の懐を探ったりはしないだろう)

賢一は自分の部屋を 適当に荒らしまくっている、警備員とその仲間の殺し屋を見上げた。

(よしかなりいい感じで集中出来た。

これなら今までの 最高記録更新するかもってこれから殺されるのにレベルアップしても意味ないか)

そう思って賢一が心 の中で自嘲している と彼の耳に2つの足音が聞こえてきた 2つの足音はコツコツとゆっくり近づいてきて、賢一の間近くまで来ると止まった

「まったく随分手間を かけさせてくれるぜ、無駄に広い部屋に住みやがってまったく何で俺が家探しなんぞ」

そう言って侵入者のうちの若い殺し屋は悪態をつきながら、つま先で賢一の腹を蹴り出す、それは 鬱憤を晴らすかのように何度も続いた

ドツ、ガツと鈍い音が部屋中に聞こえる

「それぐらいにしとけ」

そう言って仲間の警備員が、殺し屋の肩に手を置いて、やめさせる。

無論賢一を助けるためではない、無駄な時間消費を避けるためだ

「一応金目の物は 盗ったいた携帯も 壊したから証拠になるモノもない。

後は恨みの犯行に見せかけるだけだ」

いかにも英邁そうな 印象の警備員は害虫 でも見るような冷たい目で賢一を見下ろす

「はいはいわかりましたよ。

無駄な事してないで さっさと仕事を終わらせばいいんでしょ

」

殺し屋の少年はめんどく下げに、オーライと警備員に手を上げて応じた後、最後とばかりに思いつき賢一の腹を蹴り飛ばした。

賢一はゴロゴロと横転しやがて壁にぶつかる

本来ならうめき声を 上げるのだろうが、 猿轡されているのでくぐもった声を漏らすだけだ

壁にぶつかった賢一 は首だけおこすと憎しみを込めた目で、自分を蹴りとばした 殺し屋を睨みつけ次に視線を仲間の警備員に向ける

憎悪のこもった視線 を向けられた二人だったが図太い神経のようで怯みもせずせせら笑うだけだった

「気が済んだか？」

警備員はひとしきり笑い終わった後、 詰めた目で、 賢一を見た

猿轡をされている、 賢一は叫ぶことも言い返す事も出来ず、悔しげな目で警備員を見る

そんな賢一の様子を 少しの間見下ろした 警備員はふんと鼻で笑った後、背を向け て部屋の外に向かいながら振り返りもせず、一言始末しろと 仲間に告げる

「了々解」

警備員からの命令に 心底嬉しそうな笑みを浮かべた後、 殺し屋は左手のひらを大きく開く

ポツと数秒後には 手のひらに炎が生まれた

（いよいよか）

ニヤニヤ笑いながら手のひらの炎を遊ばせ近づいてくる、殺し屋を賢一は疲れたような諦めの目で見上げた

なぜか不思議と恐怖は湧いてこなかった　　気になる事は自分の能力で悪事の証拠が守る事が出来るのかと愛しい女への贈り物の事だけだった

（駒場さんの事は　　尊敬してたが早死にする事まで真似る事になるとはな）

賢一の脳裏を自分たちを導き守ってくれた今は亡きリーダーとの懐かしい日々が思い出される、次に思い出すのは、自分を愛してくれる女

（駒場さんもこんな　無念の思いで死んで　言ったのか？　いやあの人は悔いを残して死ぬような人じゃない）

「お別れだちいと　熱いがじきに熱さも　感じなくなる」

思い出が走馬灯のようにかけていた賢一　　を殺し屋の非情な
声が現実に戻す

「じゃあな」

炎を纏った殺し屋の 腕が賢一の胸に触れた

ジュツと肉が焼ける 音と焦げ臭い匂いが 徐々に部屋に充満していく

殺し屋はすでに賢一 から離れ、部屋の入り口の前で、だんだんと燃えていく賢一を見続ける

やがて賢一の全身に 炎がまわったのを確認すると、ドアを締め、先に出ていった警備員の後を追って出ていった

残された賢一は全身 火達磨になりながら も意識の続く限り能力を使い続けた

(せめて俺の代わりに彼女たちを守るための手がかりを)

辺り一面炎となり 身体が焼けたただれながらも意識ある賢一は祈り続ける

(悪いが俺はここまでだ、後は任せた 名も知らない警備員か風紀委員頼むぜ

佳奈実俺たちの子を 頼む……)

火達磨になりながら 転がっていた賢一は やがて力つき動かなくなっ

数時間後

現場検証にやってきた風紀委員たちが見たのは焼けただけながらも穏やかな笑みの死顔の賢一と何故か煤一つ付いていない、携帯電話と指輸入れの箱が死体のそばの床に転がっていたのだった

彼らが怪訝な顔をしたのは言うまでもない

こうしてスキルアウト小笠原賢一は十六歳という短い生涯を終えた

序章 託された願い（後書き）

いかがだったでしょうか。

遅くとも明日中には二話目を更新する予定です

なおこの作品の制作にはズーキーさんに多大な協力を頂きました

なおズーキーさんの 作品から白影進が登場する予定です

またズーキーさんは飯屋の名義で（とある一族の解析不能^{レッドクレイド}

と（とある少年の特殊な魔術）の2つの作品を連載してます

そちらの方も宜しくお願いします

それでは読んで頂きありがとうございました？

一章（六宝才牙という少年）

「やれやれー」

「いけいけ」

「そこだー」

「ぶっ飛ばせー」

日曜日午前10時 中学校の体育館に熱気と歓声 がこだまする

それもそのはず
現在この中学校の体育館でボクシングの 練習試合スパーリングの真っ最中だからだ

だがその試合はボクシングの試合とはとても思えないほど異形だった

リングで二人の中学生がヘッドギアをかぶり、グローブをつけ殴り合っているが その片方の選手の 腕がゴムのように伸びているのだ

だがそんな摩訶不思議な光景を見ても
観客も選手たちも 誰も不思議に思わない、
ただただ試合に 熱中している

人の腕が伸びている と言うのに

だがここではそんな 程度は非常識のうちには入らなかった
何故ならここは学園都市

東京西部に位置する総人口230万人を数える都市でその約八割
が学生であり

学生たちは都市が生み出した特殊カリキュラムのもとで能力開発
を受ける

超能力者を始めとする多くの異能者を抱える街それが学園都市、
超常の力がありふれた街

手を伸ばすなどこの街ではさして珍しく はないのだ

街には手から火を出せる者も風を生み出せる者もありふれている
のだからそれも 当然だ

そんな学園都市にある第七学区内にある
ほくしん

北辰中学校のボクシング試合は佳境に入っていた

また第七学区とは学園都市内にある全

23学区あるうちの 一つで、中高生が
中心に住む学区である

「ねえ大丈夫かしら 岸田君勝てるわよね あんなに練習したん
だし」

そんな白熱する試合 を一人の女性が、ハラハラしながら涙目に
なって見ている

彼女が見ているのは 手を伸ばしてくる相手にめった打ちにされ
ている少年だ

一応両手で顔をガードして守っているが腕を伸ばしている
少年は敵のパンチが 届かない距離で両手を伸ばしガードの上から
殴りながら、ボディにもパンチを叩き込む上下のコンビネーション

で攻め立てる

「もうあれじゃ勝てないわ、六宝君タオルを投げて」

そう言って狼狽した 女性はある自分の横で 鋭い目で両腕を組んで試合を見ている 少年にタオルを投げるように指示する

女性の名は鉄装綴里 (てっそうつづり)

この北辰中学校ボクシング部の顧問であると言っても、

ボクシングなんて ルールも知らない名ばかりの顧問だが、

今日は第十八学区の 名門中学校

蒼天飛翔館中学校と の練習試合なので

普段はボクシング部 コーチに任せきりで 部活動にも顔を出さない彼女だが、長点上機学園の兄弟校でもある蒼天飛翔館で あるため、コーチ任せとはいかず参加している

眼鏡をかけていかにも気弱そうな印象だ ちなみにこう見えて警備員だったりする

「まだだ」

顧問である鉄装の方を見もせず、六宝と呼ばれた少年は鉄装の意見を却下する

「そんな岸田君がどうなってもいいの！ それでもコーチなの

」

鉄装は六宝少年の 持っているタオルを 取ろうと腕を伸ばすが六宝はその腕を 払いのける

パチンと音がなり

痛みで鉄装は手を引っ込める

そこでようやく六宝は鉄装の方を見る

少年の名は六宝才牙（ろくほうさいが）

先ほど鉄装が言った 通りこの北辰中学校ボクシング部のコーチ
兼マネージャーで ある

年は14で中学二年 身長155と小柄な体に浅黒い日焼けした
肌に頬には大きな ガーゼを貼っている その下に頬をか
すめた銃創があることを 知る者は少ない

「ひっ！」

鉄装は才牙を見て

小さな悲鳴を上げて 後ずさる

（ほんとに牙みたい）

鉄装は才牙の異常に 発達した犬歯を恐る恐る見た後、才牙の顔
色を伺う

才牙は先ほどまでリングを見ていた険しい表情を緩めて口元に笑
みを浮かべると ゆっくりと優しい口調で鉄装に話しかける

「先生にはわからないかもしれないが見た目はボコボコにやられ
ているが、あの伸びるパンチはそんなに威力はない」

才牙はきっぱりと断言する

「つまりあんまり効いてないってこと」

鉄装が恐る恐る小さな声で聞く

「ああ。そのとおりだよ腹は腹筋鍛えてるし、顔はしっかりガードしている

よく見てみたらわかるはずだ、岸田の目はまだ死んではいない」

才牙はまるで出来の悪い姉をすっかり者の弟が諭すように優しい調子で話す

「目が死んでない？」

鉄装は首を傾げた後、言われた通りにリングでめった打ちにあっている岸田少年を見る

よく見ると岸田少年の目はじっと伸びるパンチを見据えており、口元笑みを浮かべていた

「残り一分か！勝負はラスト30秒に入ってからだな」

才牙は、タオルを持っていない方の腕に持っているストップウォッチを見る

「時間だ……ラスト30！ぶちかませ！！」

頃合いだ才牙は大声を張り上げGＯーサインを出した

「頑張ってねー 最後だよ」

鉄装も何とか大声を 出して涙目で応援する

才牙のGOーサインで 岸田少年は動いた
ガードを外して飛び出す

それを見た手を伸ば していた少年ががら空きになった顔面目掛けて、腹を殴っていた伸びた腕を、上に突き上げダブルパンチで顔面を狙う

このパンチを岸田少年は首を振ってダブルパンチを避け

ドーンと思いつきリングの床を踏みつけて、前に飛び出す

まずいと思った対戦相手の蒼天飛翔館の選手は慌てて腕を戻そうとするが

間に合わない

仕方なく腕を戻しながら横っ飛びに逃げようとするが

岸田少年が射程距離に届く方が速い

「決める!!」

才牙が叫ぶ

岸田少年がそれに応えるかのように、大きく振りかぶりながら全体重を乗せて身体ごと前のめりになりながら叩きつける

ドーンと重い手応えが岸田少年のグローブに伝わる
(決まった)

岸田少年は勝利を確信する

カンカンとゴングが 鳴り響いたのと、 腕が元の長さに戻った少年が大の字に倒れるのはほぼ同時だった
10カウントはいらなかったのは言うまでもない

「じゃあ私は蒼天飛翔館の顧問の先生に 挨拶とお礼を言ってくるから皆は先に帰って下さい。」

六宝君後をお願いね」

そう言うってから鉄装 は解散と言いながら 蒼天飛翔館の顧問のいる方に走っていた

「やれやれあれで警備員が務まるのか？」

才牙は走っていた 鉄装の背中を心配 そうに見た

「大丈夫なんじゃないの？ どうせ実戦に 出ても足手まといだから事務方ばかりやってるって」

そう言ったのは先ほど見事な快勝をした 岸田^{みつお}光雄少年だ

ちなみに才牙のクラスメートであるボクシング歴一年の素人だが元々運動好きなので身体能力は高い、レベル0の少年である

「早く帰ろうぜ、 せっかくの日曜なんだまだ昼前だし遊ば

うぜ」

そう言ったのはボクシングの部員で唯一の一年石堂敦士だ

一年生なのにボクシング歴十年の経験と 部内で一番の長身

176センチの体を持つため先輩達に対しても、敬語は使わな

い

図体だけでなく経験に見合う実力をもちボクシング部の中では才
牙以外に負けた事はない

彼もレベル0である

今日も一番手で一ラウンドKO勝ちを収めている

「その前に飯だろが 才牙何食う あれ

栗原の奴は？」

岸田が見当たらない 仲間に気づいて

辺りを見まわす

栗原と言うのは

くりはらゆうや

栗原雄也の事で

岸田や石堂と同じ ボクシング部員である

身長145 体重42キロで部内一のスピードを誇る。

長い茶髪をしており 女性のような白い肌 をしており顔をも整
っているため女子に もてる。

中学二年生で才牙達 とは別のクラスである

「雄の奴なら、リングの上で練習したいって言って練習している」

才牙が岸田の質問に 答える

「まじかよ3-0の判定で圧勝したのか 全くこれ以上強く

なっでどうするんだ

あの熱血バカは既に レベル4だつて言うのに」

岸田がその貪欲さに 呆れながら言う

栗原は北辰中学校にわずか三人しかいないレベル4の一人で
その能力は触れた物体（生き物は不可）を人形に変えて操る

人形使い

（ドールマスター）である

人形は触れた物により強度が変わる（ただし固く頑丈な物ほど維持出来る時間は 短くなる
それでも鉄程度の強度なら、数時間ぐらい百体同時に操る事ができる

そんな凄い能力を持つが何故かある日突然力の封印を宣言してボクシング部に入部し以来試合で能力使用が可能なのに

使わないで闘い

腕が鈍らないように 自主練する時と身体 検査の時にしか能力を使わない変わり者 となったのだ。 彼がそうなってしまったのは実は才牙に こてんぱんにやられたと言う過去があるのだが
ここでは省く

「まあいいやあの変わり者はほつといて みんなで飯食いに行こうぜ腹減ってしかたないぜ」

岸田が早く行こうと みんなを促す

「賛成ー」

大河原が手を上げて 同意する

「そうだな。」

栗原の練習を邪魔するのは悪いし三人 で行くか」

そう言って才牙も 同意する

栗原と才牙たちを入れた計四人がボクシング部の部員数である
コーチ兼マネージャーである才牙は試合 に出ないので、選手
は岸田たち三人しか いない
この人数で部の称号を得ているのは才牙が警備員の格闘術教官に
推薦されたからである（才牙は断ったが）

そんな弱小ボクシング部が、名門中学校 蒼天飛翔館にスパ
ーリングとは言え全員勝ったのである快挙と言ってもいい

「よし決まりだ

ちよつと遠いけど

第四学区に行こうぜ 飯ならあそこだ何でも食える」

善は急げとばかりに 岸田は校門に走って いく

「たまには贅沢も いいか」

大河原が追いかけて行く

「やれやれ」

才牙は財布の中を ちらっと見た後

「減量後だ大分喰うぞ。

仕方ない足りない分　は自分が立て替えて　後で鉄装先生から貰うとするか」

才牙は二人の腹ぺこ　を財布をしまいながら急いで追いかけて
いった

「てめえらさっさと　どきやがれ、腹ぺこ　で死にそうなんだ」

校門を出てから約10分

岸田たちに追いついた才牙は、合流早々　10人ほどの人間に
取り囲まれてしまっ　ていた

空腹の限界にきてた　岸田が怒りのままに　怒鳴り散らす
だが取り囲んだ者たちはニヤニヤ笑って　いるだけで、囲いを
解かない

才牙は囲いをしている者たちに冷たい目線を向ける

「一体どういうつもりですか？

勝負はついたはずでは再戦を希望なら、　日時を決めてから」

「うるせえ」

囲いを作っている　一人の男が怒声を　あげて才牙の声
を　遮る

その男の手がグネグネと伸び始める

「てめえらみたいな レベル0のクズどもに負けるはずがねえんだ。

試合では油断した だけだリアルファイトなら敵じゃねえんだよ。

行くぞこいつらをぶっ飛ばして蒼天飛翔館の面子を守るんだ」

手を伸ばしながら 岸田に負けた少年が仲間を煽る

蒼天飛翔館の生徒たちが試合の結果に不服でお礼参りにやってきたのだ

おうー ぶっ殺せと 煽られて蒼天飛翔館の生徒が吠え声を上げる

それを才牙は冷たい 侮蔑を込めた目で見ながらゆっくり前に歩き手長人間の眼前に立つ

「公の場で負けたら 闇討ちか、名門が聞いて呆れる
お前らみたいな馬鹿を相手にして大事な 選手たちに怪我を負
わせるわけにはいかん……来い俺が相手だ」

才牙はそう言う

左拳を軽く握って 顔の前に出し、右手 は顎に付け、肩幅
ぐらいに足を開き 右足を後ろにひく

ボクシングのオーソドックスの構え才牙は才牙は戦闘態勢に いるのだった

一章 (六宝才牙という少年) (後書き)

アドバイス、感想待っています？

二章 (エリート学生のお礼参り異形?異質) (前書き)

最新話投稿します

二章（エリート学生のお礼参り異形？異質）

戦闘態勢に入った　　才牙は鋭い目で手長　人間を見据えつつ、
じりじりと構えたままでゆっくりと間合いをつめ出す

対する手長人間は　　両手をブラブラさせながら、才牙を睨み
つける

緊迫した空気が辺りを包み、才牙と手長人間以外の者は敵　味方
関係なく皆息を呑み見守る

一方は手長人間の勝利を

もう一方は六宝才牙　の勝利を望むという　違いはあるが
二人のこれから始まる戦いを見守るという点は変わらない

沈黙と静寂が支配する空間はますます重苦しい空気を醸し出して
いく

ジリジリと距離をつめていく才牙の足音と手長人間が両手をブラ
ブラ振っている音しか聞こえてこない

ジリジリ

と才牙が近づき

ブラブラ

と手長が腕を降り続け

ジリジリ

と才牙が近づく

(……もう耐えられん)

重苦しい空気に耐えられなくなった岸田が横で才牙をぼくと見ている大河原を　肘でツンツンと小突く

「何すか？」

大河原は鬱陶しげに　首だけ振り向きつつ　岸田の小突く肘を上から叩いて止めさせる

岸田は、はたかれた手を引っ込めた後
大河原に身をのりだして耳元に囁く

「なあ俺たちも加勢　しないか？」

岸田が指で才牙と手長人間の二人を何度も指で差しながら言う

「加勢って必要ない　でしょ」

大河原は小声で応じ視線は再び才牙の方に戻す

才牙の強さを知っている大河原は愚問と　ばかりに切り返す

「じゃあ風紀委員か　警備員でも呼ぶか」

自分の案を否定された岸田だが、めげずに次を案をひそひそ声で言う

「はあ」

と一息をため息をついた大河原は、部の先輩の案をあっさり却下する

何言っただこいつ とばかりに

「風紀委員は基本的に校内活動が原則 まあ一部校外活動

とかするのもあるけど なでも来ても役立たずだろ。 スキルア
ウトならまだしも、能力開発で学舎の園としのぎを削っている第1
8学区の名門校それも長点上機学園の兄弟校の能力者が10人

俺が風紀委員なら間違いなく、見てみぬふりだね。

警備員だって同じだろよっぽど正義感があって根性座った奴じゃないと、進んで関わろうとしないよ」

大河原は冷めた調子で言う

まるで警備員も風紀委員も全くあてにしない信じてない様子が
はつきりうかがえる

「うう言われて見ればそうかも」

岸田は自分たちの学校にいる風紀委員や 警備員に所属している
教師などを思い出して納得する

ある者は無能力者が 虐められるのを見ても知らんぷり

ある者たちは見回り も行かず支部で麻雀 かネットゲーム三昧

ある警備員は身体検査が近づけば、成績あげようと躍起になり警備員の仕事など 他の風紀委員に押し付ける始末

無論全ての警備員 風紀委員がこうとは 思わないがタダ働きを強制される二つの 組織モチベーションを維持している者など 少ないのが自明の理だ

「じゃあどうすんだよ？ まさか才牙に任せて逃げるとか言うんじゃないだろうな」

岸田が声を大きくして言う

「逃げてでも構わんぞ」

岸田の大きな声が 聞こえたのだろう 才牙が岸田に逃げる よう促してきた

「貰った！」

岸田の方に才牙が気を取られて隙ができたのを見た手長人間は、歓喜の声を 上げながら、ブラブラ振っている両手を伸ばして攻撃を仕掛けた

「アホか」

才牙は自分めがけて 波打ちながら伸びてくる手長人間の両手を呆れた様子で見ながら首をあっさり左右に振ってかわすと ドンとコンクリートの地面を思いっきり蹴って手長人間のがら空きになっ

たボディー目指して突っ込んでいく

早い手長人間も慌てて腕を戻すが間に合わない

才牙は走りながら左手をまるで樽でも抱えているかのように

左脇に引きつける

それはボクシングで言う左ボディーを打つ構えだ

才牙はその構えを維持したまま、手長人間の懐に迫っていきながら、左側に反復横跳びのように跳んだ

直後パンツと銃声が 鳴り響く

「馬鹿な！」

手長人間は才牙の見事な横っ飛びを見て驚愕した

有り得ないと

銃弾は手長人間が 隠し持っていた超小型サイズの拳銃のも
のだった

手長人間はこれ見よがしに腕を伸ばせば がら空きになった懐
を必ず狙ってくる これを逆手に取り 背後から攻撃す
る 以前はスタンガンとか小石を使っていたが、知り合いのと
ある統括理事の私設部隊員から、この銃を手に入れてからは喧嘩で
は愛用している

わざと焦って手を戻したりすると、敵は 前のがら空きの懐し

が見えず簡単に引つかかる。一応実弾も使えるが それではいたぶれないし後々大事になるのでゴム弾を使用している

そんな彼の必勝の策を目の前の平凡な学校の弱小ボクシング部の少年があっさり破った

手長人間はパニックに陥った、見せかけ で腕を戻すのを止めると右手に持っていた拳銃を発砲しようと狙いをつけるが、左側に横っ跳びした 才牙が左足着地と同時に切り返す方が先だった、左足一本で 反対方向に跳んだ才牙は腰に構えていた 左手を空中で顔面に 引きつけ左拳を頬に引っ付ける

「何でだ何で避けれたんだ！」

手長人間は発砲する のも忘れ叫ぶ

才牙は左拳を頬に引っ付けたまま着地する

「不意打ちとしては いいせん言ってたが 目の前に迫る敵を見ずにずっと戻して る途中の腕ばかり見てたら変に思うのは当然だろうが」

「それだけで銃を持ってるって気づいたのか」

信じられないと手長人間は言う

「別に銃持ってるなんて気づいてねえよ ただ迫る敵より気に

なるなんてあの状況じゃ不意打ちしかねえだろうが」

才牙は吐き捨てるように言うと同時に
手長人間の懷に飛び込む

手長人間はパニックから立ちなおり拳銃
で狙いをつけようとするが、ビシッと右手に疼痛がはしり銃を落としてしまう

「よし命中」

小石を見事手長人間の指に命中させた岸田がガッツポーズをする

「しまった」

手長人間は慌てて
伸びた腕で地面に
落ちた拳銃を拾おうとする

「武器に頼るなんて、てめえそれでもボクサーか！」

銃に気を取られた
手長人間に罵声を浴びせながら、才牙は
左手を横にそらし、
左手が輪投げのような
斜めの軌道で手長
人間の顎の先端を撃ち抜く

ガッと肉を打つ鈍い
感触に続いて相手の
顎を砕いた手応えが
才牙に伝わる

顎を打ち抜かれた
手長人間はフラフラ
と右に左に揺れな

がら、焦点の合わない目で才牙を見る

そんな朦朧状態の敵になお才牙は踏み込む

「もう一発」

才牙は膝を曲げ、重心を落としつつ

フラフラと柳の

ように揺れる手長人間の顎めがけて左拳を

突き上げる

グシャとさらに手長人間の顎骨が碎ける

才牙の左アッパーが 完璧に決まった

顎をかち上げられた 手長人間が数メートル浮いた後、仰向けで

地面に叩きつけられる

ピクピクと僅かに

白目剥いて痙攣して いる手長人間を見

ながら才牙は呟く

「一発で意識刈り取ったのはわかったが、銃なんて使ったんだ
追い打ち食らっても文句は言うなよ 後さっきの続きだが お前
が仲間にな意打ちさせようと思った からお前の視線に気をつけ
てたんだ

そしたらためえの右拳見てたから、注視したら銃口がわずかに見
えたってわけ後はお前の様子から発砲のタイミングを掴んで、発砲
直前に飛び退いたってわけだ 」

才牙はそこまで言うてから、白目を剥いて痙攣している手長人間
に視線を向ける

「聞いてねえか」

才牙は気絶により能力が解除され、元の長さに戻っていく、手
長人間の両腕を　ちらっと見た後
踵を返し仲間の元に　戻っていった

自分たちのリーダーが完全敗北したのを　見た他の蒼天飛翔館
の生徒たちは無言で才牙を見送るしか出来なかった

二章 (エリート学生のお礼参り異形?異質) (後書き)

いかがだったでしょうか?

では次も読んで頂ける事を祈りつつこれで失礼します
ありがとうございました ?

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7536r/>

とある異質な右腕（メインアーム）

2011年10月6日06時12分発行